

相撲記 よもやま —すもう四方山ばなし—

新宿区

川瀬一雄（春日山町一丁目出身）

相撲は日本の文化

今、江戸東京博物館で「両国と大相撲展」が開催されている（十二月十八日まで）。屏風絵から錦絵、番付をはじめ相撲の歴史や諸資料が展示されている。相撲は日本の國技として栄え伝承されて今日に至っているが、この展覧会を見ればその奥深さ、美しさが理解して戴けると思

い紹介に及んだが、相撲は眞に日本の誇り得る文化なのである。昔は力士は神の力を現すことの出来立者として尊重され、遇されていたと聞くが、そうした史実に根ざした輝かしい歴史や伝統があることを忘れてはならない。

世紀の大横綱双葉山と木鶏の話
昭和を代表する力士と言えば何んと言つても双葉山である。相撲の真髓を表現する名言は「心技（氣体）」だが、これ

を備えもつた名力士であった。彼の残し

た六十九連勝の偉業は未だに誰も破ること

が出来ない大記録である。昭和十四年

一月場所四日目に平幕の安芸の海（後の三十七代横綱）に敗れるのだが、この時

の寓話が残されているので紹介しよう。

彼の後援者で精神的に支え指導された安岡正蔵先生に「フレイマダ・モツケイタリエズ・フタバ」と打電した。双葉はかねてより安岡先生が中国の古典にある「木鶏の話」を聞き心に強く響くものがあり自らの座右として精進したと言う。

その話と言うのは或る日さる王が素質のある鶏を手に入れ開鶏師の名人を呼びじた。十日ほどして王が「もう使えるか」と聞くと「今空威張りの最中でとてもとても」と答えた。せっかちな王はそれか

無心であたかも木で彫った鶏の如く不動

の構えが整い真に天下無敵です」と。

人生の教訓とともに実に味わい深い内

容でありもつて学ぶべしである。

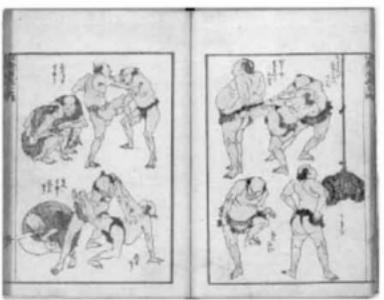
古指導を行ひ第二の双葉、大鵬、千代の富士等々を育成し外國人力士に対抗する

ことで相撲界が隆盛するチャンスが生れ来てると考えている。日本人力士よ命がけで稽古し強くなれと言いたい。

外國人力士の台頭と相撲界の将来

相撲界も国際化したと言えはそれまでだが番付を見るときをときめく一人横綱朝青龍ははじめ幕内力士四十二人のうち外國人力士は実に十二人いる。然も三役八人中外國人力士が半数の四人を占めるとあっては文化だ國技だと言つて胸が張れないのが現実である。しかし強いことは確かだし日本人力士が勝てないのでから致し方ない。

さりとてこの儘で良いとは言えず、協会としても対策を考えねばなるまい。まずは強い力士の育成に必死に取組むべきである。親方を勤員し組織的に科学的に稽



郷土力士 霜鳥への直言

霜鳥がここに来て低迷しているのは怪我や体調不良もあるが、技と氣の二面も大きな要因と考えられる。先ず立合いの研鑽が必要だ。立合いは五分で良い。教えて出来るものではなく稽古を通して体得する他はないが、もっと研究し心がけるべきである。

次に稽古不足から来る踏み込みが弱く相手に対する圧力がないから受身の相撲になつてしまう。得意の右が差せれば良いが、相手も研究しているのでいつも思うように差せない。いきなり右差しに行くのではなく左上手を先にとり、右が強いのだから右から押つづけて出る相撲をとれば今の様なことはならないと思うが……。

右四ツがつぶりの霜鳥の相撲は横綱大関と言えども倒せる力をもつていて、大器である。郷土の期待に応える奮闘を祈つて己まない。

(日本実業団相撲連盟 副会長、
東京農業大学相撲部OB会 会長)



前列左より、双葉山、川瀬（筆者）、鏡里



左より、名寄岩、双葉山、羽黒山